日本学術会議
日本学術会議の第三者評価機能に関する検討委員会（第５回）
議事要旨

日　時：平成２６年２月１４日（金）１５：００～１７：００
会　場：日本学術会議５階　５－Ａ（１）会議室
出席委員：岡田委員長、室伏副委員長、三木幹事、池田委員、小林委員、桂委員、広渡委員、林委員、計８名
事務局：盛田参事官、白村学術調査員、佐藤審議専門職、寺島事務職員

配布資料
資料１　　前回議事要旨（案）
資料２　　報告「日本学術会議の評価・提言機能について」（案）
参考　　委員名簿

議事
１．前回議事要旨（案）についての確認
冒頭、岡田委員長より資料１の前回議事要旨（案）についての確認があった。

２．提案「日本学術会議の評価・提言機能について」（案）の検討
○続けて資料２の報告「日本学術会議の評価・提言機能について」（案）（以下、「報告書(案)」と記す)の検討に入った。(岡田委員長から全体的な説明があった。)
○「報告書(案)」第１０頁「３．日本学術会議の評価・提言機能の在り方」について、林委員と岡田委員長より報告・説明を受けた。
○「報告書(案)」中「３．日本学術会議の評価・提言機能の在り方」の「（３）第４期科学技術基本計画のレビューと第５期に向けての提言」について、「日本の展望―学術からの提言」は６年ごとに改定されることから、次期「日本の展望―学術からの提言２０１６」と第５期科学技術基本計画のレビューとの関係をどのように捉えるかについて出席委員に対し意見を求めた。
○「報告書（案））を読むに、これでは課題別委員会を設置する必要があったのかと疑われかねない。「日本学術会議の評価・提言機能について」ということであれば、２０１１年７月７日に学術会議より出された報告「日本学術会議の機能強化について」の延長で議論を展開すべきであり、科学技術基本計画を念頭に置く以上に、学術会議は今何をすべきなのか、またそこで議論されたことが、どのように広く社会に反映されていくべきなのかについて議論し、提言を出すべきであろう。
○提言を出し、それが実施された後の調査等を考慮すると、どこまでこの課題別委員会

が踏み込んだ提言を出していいのか、という点ついても検討するべきなのだろう。
○提言を出すということと、その後のフォローの問題は別の問題として検討するべきである。
○説得力のあるなんらかの結論を出すためには、各委員に相応の労力を払って頂くより他ないが、そもそも時間的にも審議が足りないといえるのではないか。
○報告書の文面からは、この委員会の目的や委員会で何が議論されたのかを読み取ることが難しいように思う。その理由の一つは、委員会設立当初に委員長が念頭に置かれた議論展開と、委員会で実際になされた議論との間に若干のズレが生じたことにあるのかもしれない。
○「第三者」性をめぐる議論においては、とりわけ科学技術の問題を論じる上で学術会議が「第三者」という立場をとることができないことに議論の行きづまりを感じる。
○事実に基づいて発言するにせよ、この委員会がどこまで責任をとりうるのか。また学術会議の規定(とりわけ「評価」というものをめぐって)に書かれていない点にどこまで切り込んで言及して良いのかを検討する必要がある。
○学術会議が評価活動を行うことの是非、という根本的な問題に行き着く。科学者コミュニティーとしての学術会議に、どのような評価活動が求められているのかを検討する必要がある。
○この点に関連して、アメリカではどのような評価活動が行われているのかについて、事例説明があった。
○国や府省が実施している政策が、科学者コミュニティーに限って有効かどうかを自身の立場から調査検討する、という任を学術会議が担うことは可能性としてはありうる。
○科学者コミュニティーが評価活動にどのように関与するかを検討する上で、林委員の提案は重要であり、その提案をクローズアップする形で報告書を執筆して頂きたい旨が述べられた。
○政策評価法をはじめ評価の対象は主に府省であり、学術会議が科学者コミュニティーの立場から関与し、その有効性なりを評価するという論調で記したい。
○評価する側の社会的影響力やインパクト、そして発信能力はこれまでの議論の中でどのような位置づけを得るのかを検討する必要がある。
○「評価」と「提言」は異なるものであり、「評価」が何を含意するのかを考える必要があるが、「提言」というのはすでに「評価」の一面を含んでいるといえる。学術会議が関与する「評価」というのは、社会全体をにらんだものでなければならない。
○「報告書(案)」中「１．はじめに」の箇所で議論の枠組みを明記する必要がある。
○「提言」するにせよ、社会的な宣伝不足という感は否めないのではないか。
○文部科学省のプログラム評価についても、注目すべき事例として報告書の中で触れていきたいと考える。
○「報告書(案)」中「３．日本学術会議の評価・提言機能の在り方」の「(３)第４期科学技

術基本計画のレビューと第５期に向けての提言」を削除し、その前の「(２)日本学術会議の評価・提言機能の可能性について」を膨らませてはどうか。

○「報告書(案)」中第１４頁「※参考」部は、第三者評価をめぐる狭いネガティブな側面が強いため、プログラム評価をはじめ、評価対象を広げる意味で、ポジティブな側面を打ち出すことはできないか。

○今回の議論では評価の対象として１．課題評価、２．プログラム評価(科学技術振興政策など)、そして３．サイエンス　フォー　ポリシー(政策に対する科学的な助言)が挙げられる。今回報告書を執筆するにあたっては、２と３のどちらに焦点を当てたものになるのか。

○２と３のどちらも取り入れて良いように思う。

○タイトルを「評価に関わる機能について」とし、狭義(評価のみを求められるケース)の「評価」を学術会議が担うという状況をフォーカスするというのを検討してみてはどうか。

○タイトルを「関わる」とするより、「係る」とするのが良い。

○タイトルは「日本学術会議の評価に係る機能について」とする。

○学術会議が評価機能を確立するためには、スタッフ体制の強化なども打ち出さなくてはならないと思うがそこまで書いてよいか。

○事務局・スタッフの充実などは、半年ほど前に出された総合科学技術会議の提言が参考になるかと思う。

○本日の会議で各委員から出された、学術会議が評価を実施することについてよりポジティブに積極的に関与していくべきとの意見・指摘を踏まえて案を練り直したい。

３．その他

○次回第 6 回委員会は 3 月 5 日(水)13 時から 15 時に開催する。